

SYMBIO

シンビオ

「SYMBIO」発刊に寄せて

くらしと「E」ネルギー ◆ 生活者へのメッセージ ◆

専門家にきく

敦賀夏期セミナーに参加して

「データが語る」

原子力のイメージはどう変わったか？

くらしのクローズアップ

「ジャガイモから食の安全を考えよう」

● レッツ・ウェブサイト

● クロスワード



2005
vol. 1

「Symbio」の発刊に寄せて



シンビオ社会研究会・主宰
吉川 榮和
(京都大学大学院エネルギー科学研究科)

エネルギー・環境問題を中心に、技術と社会・環境との関わりについて、大学と民間企業、一般社会の人々の間で共考する情報交流のコミュニケーションの場として、シンビオ社会研究会の活動を平成10年度に開始しては6年余りが経ちました。シンビオ社会研究会ではその活動の一環として筆者を代表者に、各大学、企業の有志メンバーでチームを構成して、平成15年度から原子力安全基盤調査研究「原子力発電の社会的リスク情報コミュニケーションシステム」プロジェクトに3年間取り組んでおりますが、このたび、このプロジェクトチームの女性メンバーである、秋元真理子さん(旭リサーチセンター)主幹研究員、伊藤京子さん(大阪大学大学院基礎工学研究科助手)、日比野愛子さん(京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程学生)、寺戸美香さん(京都大学大学院エネルギー科学研究科博士課程学生)が中心になって、このプロジェクトでの取り組みを社会に紹介するニュースレターを発行することとなり、シンビオ社会研究会がその発刊のお世話することになりました。シンビオ社会研究会では、これまで研究談話会や技術交流会の主催、学協会等との共催で一般講演会や国内・国際セミナーの開催の支援、ホームページによる双方方向の情報交流が主たる活動でしたが、今回のニュースレターの発刊でまた活動の範囲が拡がることになりました。

初刊号のニュースレターでは、秋元真理

子さんが編集チームになって企画にあられました。私たちが日頃取り組んでいる上記の原子力のリスクコミュニケーションプロジェクトに関連する話題を盛り込みつつ、一般の人々とくに女性層には内容が難しいと敬遠されている原子力関係の話題でも、肩が凝らずに読めて親しみのあるものにと、編集陣の方々と何度も編集会議を開いて検討されました。その結果、くらしとエネルギー、原子力の安全性についてそれぞれ専門の方へのインタビュー記事や、生活者の原子力への意識の変遷、原子力地元地域の女性の声の紹介記事などで、今回のニュースレターを編集して頂きました。インタビューや寄稿等で編集委員会にご協力頂いた、中上英俊様、北田淳子様、青木英人様、岡野利映様に厚く御礼申し上げます。また編集メンバーには、ニュースレターの名前をどのようにするか、大分お悩みになりましたが、ニュースレターはリスクコミュニケーションプロジェクトが終わった後もシンビオ社会研究会から発刊を継続する気持ちを含めて「Symbio」を用いることとし、そのロゴマークのデザインを一新しました。今後、このロゴマークをシンビオ社会研究会の活動に一貫して用いていきたいと思っております。

皆様には今後とも益々のシンビオ社会研究会へのご参加、ご支援、ご協力をどうかよろしくお願い申し上げます。

◆住宅をエネルギーで評価 — 住環境計画研究所創設のきっかけについてお話を聞かせてください。

中上 もともと大学院で環境工学という分野を専攻し、建築ではめずらしくエネルギーのことを研究していました。まさか大学でやっていたことがビジネスになることも思わなかったのですが、大学院を出たのが1973年で、ちょうど第1次オイルショックの年でした。出て、いきなり今の研究所を創設したのですから、すいぶん無茶なことをしたもんだと思いますよ。その後第2次オイルショックがくると、エネルギー問題はますます重要なテーマとしてとりあげられ、国の省エネ対策をつくるお手伝いをしたり、エネルギー会社の将来の需給見通しなどをやるようになりました。

— 中上さんご自身は、建築を専攻しながらなぜエネルギー問題に関心をもちたのですか？

中上 当時、私が大学にいた1970年前後ですが、日本でプレハブ住宅の生産が始まった時期でした。プレハブ住宅は、それまでの住宅とは異なる工業製品、ならば性能をきちんと評価しなければならぬ。では、どう評価したらよいかというテーマの委員会ができて、私の教授にも依頼がきていたわけです。私は、ひとつの評価方法として、住宅設備の充足が評価基準になるはずだと考えていました。その場合、暖房設備など、ひとつひとつ設備の名前をあげていたらなかなか評価がしづらいので、それを横串でさす指標として、「エネルギー」でやったらどうか、と提案したわけです。

エネルギーが面白い点は、インシャルコストとランニングコストがあることです。インシャルコストというのは、住宅の持っている設備の出力、大ききみたいなものです。一方、どう使っているかというのがランニングコストで、キロワット時であるとか、キロカロリ、何リットル、などで説明できますから、インシャルでの設備の性能と使い方、両方攻めることができる。で、エネルギーがよいのではないかと思つたのです。ただ、ユーザーからすると、暖房代、給湯代でお金を払っているわけではないので、ガス代、電気代に置き換えないとわからない。それで、住宅で使われているエネルギー全部をトータルでみて、さらに用途別にみたらどうか、そんなふうにと調べ始めたわけです。

◆増えるからダメだというのは、 少々短絡的

— エネルギー問題というと、わたしたちがすぐに思い浮かべるのは「省エネ」ですが。

中上 住宅をエネルギーに置き換えて考えるなんて、ばかげたことだと言われたこともありましたが、私は、住宅の性能をもっとこうよくしていきたい、将来のライフスタイルはこうあるべきだ、それとエネルギーとの関係はどうか、ということを見ながら調査研究を続けてきました。たとえば日本の住宅の居住水準は、もともと充足させる部分があります。しかし充足させようとする、当然エネルギー消費量は増えてしまうので、増やさないようにして充足させるはどうしたらよいか、これも「省エネルギー」なんです。

ところが、一般的に省エネルギーというと、エネルギーの絶対量を減らすことと考えるのですが、それは省エネルギーの狭い意味であって、広義の意味では、これから増える可能性のあるものについても、省エネルギーを適用していかねばいけないということですね。

増えるからダメだという言い方は、少し短絡的ではないでしょうか？ こういった議論をいつもするのですが、多くの人の考え方は、温暖化防止のためには絶対に減らさなければならぬといった方向ですね。でも、そういう考えのもとには、居住水準とかライフスタイルとかいった発想はまったくないわけです。

いつも考えなくてはいけないのは、どういった社会をつくるのか、もつと違う言い方をすると、これからの日本の産業構造をどうするの、こういう産業構造だから、こういうエネルギーが必要になる、量もこれくらいになる。一方、エネルギー消費量を増やしてはいけないというのであれば、どのような技術を活用して製品を創り出すのか、そういう発想が必要だと思うのですが、そういう議論があまりなされないのが残念ですね。

◆エネルギーを空気のように感じる若者世代
— 中上さんからみて、生活者の省エネルギー意識もだいが変わってきたと思われませんか？

中上 どの世代でとらえるかですが、われわれの世代は、親の世代がきわめて貧しい時代でエネルギーはとも貴重なものでしたから、「もつたないから消さない」と言われたことが、いまだに頭に残っています。ところが、われわれの子どもの世代になると、エネルギーは空気みたいなもので、好きなだけ使えようと思っているようなところがあります。そういう世代の人たちが、エネルギーが大変なときにきていることを理解するには、以前のオイルショックのようなものがくるか、あるいは地球温暖化のような問題を徹底的に考えてもらわないとむずかしいでしょうね。

— 「環境問題」に関しては、生活者の知識や関心は高まり、わたしたちも何かしなければいけない、と思うようになってきています。ところが「エネルギー問題」となるとまだ関心は低く、専門家が考えることという意識がどこかにあります。これはなぜでしょうか？

中上 それは先ほどお話ししたように、多くの人がエネルギーを空気のように感じているからでしょう。けれども、オイルショックがきたときは、現実にガソリンスタンドが